

《現地報告》

「日曜百姓のまねごと」から

——第3種兼業の可能性をめぐって

安 溪 遊 地*
安 溪 貴 子**

「たかが日曜百姓のまねごとを偉そうに吹聴して、原稿料や講演料をふんだくって……。百姓をしたかったら、黙って仕事をしたらよい。大学をやめたら信用してやろう。恥知らずはやめろ。良心に問え！」
(ある日東京から届いた匿名の手紙¹⁾)

「……これからは、穴のあいたキャベツを喜んで食べよう。しばらくほっとくと虫のわく小麦粉に感謝しよう。21世紀の目標は、住みやすい都市づくりではなく、食べて安心、畑づくりだな。」
(ビデオ『ポストハーベスト農薬汚染』を見た若者の声)

はじめに 西表島の農耕文化や、アフリカの人と自然などをテーマにフィールドワークをしてきた私どもが、山の中の村に家を建て、田や畑を楽しんでいるといううわさが、『農耕の技術と文化』の編集部まで伝わったようです。農業経験の実況中継をしてみても、というお誘いを受けました。

「耕す大学教員」の大先達のお一人である津野幸人さん²⁾が提唱されている、第3種兼業農家（収入はともなわれないが生活の中に農業を積極的に取り入れている人々）志願の道の途中で未熟な経験を語ることにはためらいもあり、また

*あんけい ゆうじ, 山口県立大学

**あんけい たかこ

- 1) こうした匿名の手紙に答えるすべはありませんが、私どもの授業に寄せられた感想のひとつを、その直後に出してあることと、第7節の内容がしいて言えば答えになっていると考えています。
- 2) 心の師や大先達を「～先生」とお呼びするのが、私どものこれまでの習慣ですが、ご当人からのお申し出によって、この報告では「～さん」に統一しました。

冒頭に掲げたような親切な忠告を受けたこともあるのですが、私どもの暮らしの現状、これまでのいきさつ、これからの夢についてざっくばらんにお話してみようと思います。私どもの第3種兼業をめざす試みが、ひとつの例として、農的な暮らしに興味をおもちの方々へのご参考になる所があれば幸いです。

農民作家の山下惣一さん〔1993〕は、日本の農業従事者を「正規軍」つまり親代々の農民と「ゲリラ」すなわち脱サラ農民に分けて説明しておられます。このような中で、第3種兼業農家志願者は、そもそも「日本農業を守り育てる」あるいは「わが家の農業経営を発展させる」といった目的をもった戦いに参加しているわけではありません。楽しみで始めて、いつの間にか熱中してしまった——とりあえずはそれだけなのです。農文協から多数の農業実践指南書を刊行された井原豊さんは、「日本の農業に明日はないが、あさってがある。」とおっしゃったそうです。きびしい環境の中で生き残りをかけて悪戦苦闘しておられる日本の農業従事者の多くは、出口の見えないところで絶望的な戦いを強いられているように見えます。しかし、1周遅れ、2周遅れのランナーたちが、状況が変ればトップになってしまうという例もたくさんあります。そういう意味で、「好き」や「面白い」に支えられた第3種兼業の試みは、日本の農業の「あさって」を支える大切な種子のひとつなのかもしれません。

はじめの実況中継の所では、二人の会話に架空の聞き手として編集部からも加わっていただくことにしました。(編)は、編集部、(遊)は遊地、(貴)は貴子です。

1、今の暮 (編)現在のお住まいは？

らしの (遊)山口市内の仁保という地区です。約7000町歩 (ha) の面積のうち、6000
実況中 町歩が山林という所で、その中でも幹線から5キロほど山に入ったIという村
継 です。戸数は、うちを入れて35軒ですが、Iターンで農業をするべく引っ越してきた家族が準備中をふくめて4軒あります。

(貴)山口市にもこんなすてきな場所があったの！というような自然がいっぱい
の村です。今年の春は、コブシの仲間のタムシバが白く咲き乱れ、ミツバツツジ、藤と花に切れ目がありませんでした。車に乗らないと町に出るのが難しいんですが、勤務先までは20分もかかりません。

(遊)このあいだ、沖繩の知りあいに何年ぶりかで電話をしたら、用件のあと、
声をひそめて「ところで、世間に顔向けできないようなことでもしたの？」って聞くんです (笑い)。遠くから見ると山の中で謹慎しているように見えるの

でしょうか。フィールドワーカーの責任と研究者の役割について、きびしく叱られたという大切な経験はありますが〔安溪遊地、1991a〕、別に世捨て人をしているわけではありません。

(編) 耕地面積はどの程度ですか？

(貴) 農業というのも、お恥ずかしいんですけど、1反(10a)あまりの休耕地を借りて、半分はお米を、残りは畑にしています。家のまわりにも野菜やハーブを育てています。

(遊) それでも、耕作面積が1反以上なので、農協の正組合員です。小さいけれど合併しないで頑張ってきた仁保農協の700戸の組合員のうちに数えていただいています。

(編) 今植わっているものを教えてください。

(遊) 田んぼには、津野さんが鳥取大学におられる時に習った再生紙マルチを敷いて日本晴という品種のお米と、西表島から籾をもらった黒糯米です。自分たちで籾から苗を育てて1尺(30cm)角に1本ずつ手植えをしました。

(貴) 畑には、えんどう、たまねぎ、じゃがいも、大根などが終わって、今はなす、ししとう、ピーマン、かぼちゃ、人参、にら、ねぎ、背じそ、赤じそ、えごまがあって、さといも、さつまいも、こんにゃく。それから、今年種を取り寄せた、ひえ、あわ、きび、こうりゃん。そばはこれからまく予定です。それから去年から始めた藍染めをするためのタデアイがあります。「百姓の来年」という言葉があるそうですけれど、毎日が1年生の気がします。

(遊) 家の畑の方は、まだ土が痩せているので、たいしたものはできないんですが、きゅうり、地這いきゅうり、ミニトマト、ちしゃ。ハーブでは、ミントにセージ、ラベンダー。みつば、せり、つるむらさきは自分で増え始めました。土がやせているので、さやいんげん、枝豆、十六ささげの豆類を作り、果樹では、梅、ゆずと、昔の人が植えた柿と栗。その他、季節にはもうそう竹、ハチクの筍、たらきのき、うど、ぜんまい、わらびが食べられます。ブルーベリー、さくらんぼ、ぎんなん、やまもも、を植えました。コナラの木が多いので、70本ほどほど木を立てて椎茸を育て、なめこもほんの少々。松茸は、うちの山で年に3本ほど出るかもという噂ですが、まだ1本も見ただけではありません(図1)。

(貴) 田んぼの中やまわりの溝には赤腹のイモリさんたちがいっぱいいます。それから、カエルたち、ミズカマキリ、ゲンゴロウの仲間、アメンボの仲間、トンボたち、そして膨大な数のクモたちがいます。田んぼをかきまわしてくれる

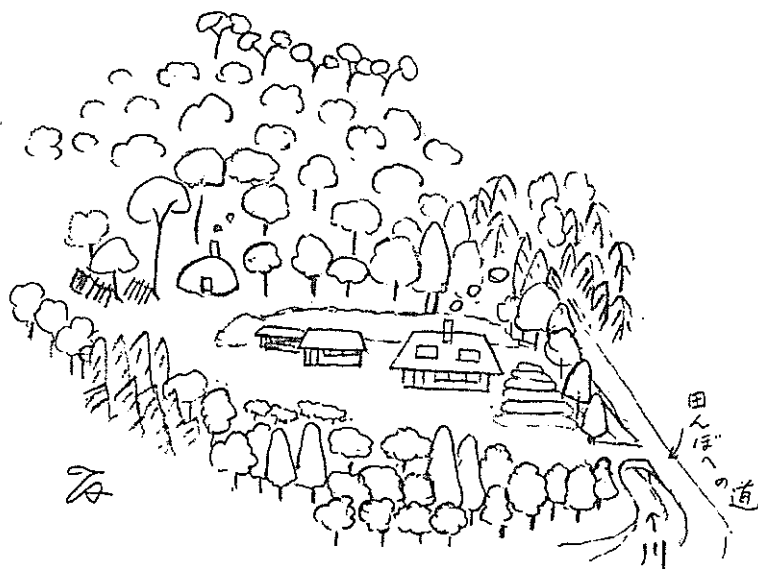


図1 こんな暮らしをしています。

ホウネンエビもいます。野生植物では、7年放ってあった田の隅が湿原になっていて、モウセンゴケ、カキラン、サワギキョウなんかが生えています。田んぼのまわりにはオミナエシ、リンドウ、サワヒヨドリなどなど、昔はありふれていたけれど、今ではなかなか見られないようになってしまった植物が生えています。

(編) どうしてそんなに残っているんでしょうか。

(貴) 除草剤をまかず、定期的に田のまわりの草刈りをしているからでしょう。秋の七草が不思議なくらいきれいに咲きます。リンドウなんか売っているものとは色の深さが全然違うんです。

(編) なるほど。ところで、例えば今日の休日はどういう感じで過ごしましたか。

(貴) 1週間降り続いた大雨がやんだ日です。昼前に来客がありました。私たちが仁保農協の組合長に紹介して、ここに土地を求めるきっかけを作ってくださった人です。玄米ごはんのお昼のあとは、畑と田んぼに行ってみました。そうしたら今年は、南アフリカのミュージシャンを迎えたりと、イベントが忙しかったうえに、この雨続きで畑は草だらけ。ししとうやこんにゃくを草の中から救い出しました。

(遊)僕は、座り込んで畑の草を抜くような仕事はしんきくさいんで、草刈り機を使って大まかな所の草を払いました。夕方帰ってきたら、男子学生がたずねて来て「何か力仕事はありませんか?」と聞くので、暖房用の薪ストーブのためのカシの木を、冬に備えて割ってもらいました。そのあと、彼は息子と二人で山の中を走って暗くなるまで遊んでいましたよ。

(編)暖房は薪なんですか。

(貴)はい、風呂と暖房は薪です。ゆずっていただいた山の広さが、たぶん1町5反ぐらいあって、その手入れをしながら出てくる雑木や枯れ木はいくらでもありますから。でも、日常の料理は今のところプロパンガスです。

(遊)教えてくれる人があって、ドラム缶を利用する簡単な炭焼釜も作ってありますが、生活排水の浄化に使うために学生さんたちと1回焼いたきりになっています。

(編)水道や電気はあるんでしょうね。

(遊)水道はありません。井戸を掘ってもらったんですが、うまく出ないのでいろいろと苦勞しています。風呂や洗濯は今のところ谷川の水をポンプでくみ上げて使っています。電気は引いてもらえました。そのうち、水車小屋ぐらい作ってみたいと思っていますが……。

(編)ところで、学生はよく来るんですか?

(貴)田植えや稲刈りのイベントの時以外は、しいて呼ばないんですが、けっこう何のかんのとやってきますね。いろいろなハーブをかごに並べて、熱湯を注いでハーブティにして出すと、女子学生たちは「いい香り!」と大喜びです。

(遊)この大雨が始まる直前の日でした、大学と市民団体が共催した南アフリカコンサートの会場に飾る七夕の竹を取りに来た学生たちと過ごした時のお話をしましょう。庭に乱雑に積んであった木の枝の整理をして、それでたき火をして、もらいものの餅なんかを焼いて、星空を見上げ、流れ星に喚声をあげているうちに、川から螢たちが上がってきて……。太古の昔から人間が見つめてきた3つの光をながめながら、お互いにいろいろな話をしました。はじめてこんなに星を見たという人もいて、とてもゆったりした時が流れて行きました。学生が帰ったあと、たき火のおきは、畑に出てくるたぬきおどしになったかもしれませんが。また、残った灰と炭は、畑の肥料になったわけです。

(編)晴れの日には晴れの仕事、客がくればともに汗を流す、というわけですね。で、雨の日には?

(貴)やっぱり田植えなんかは小雨ぐらいでもやりますし……。よほど忙しくな

いかぎり毎週1度1週間分の朝食のパンを焼いています。さいわい、国産小麦粉も、西表島の無農薬の糠も手に入るので、フランスの田舎パン風に焼いています。おいしいですよ。

(遊)地ビールの素で、健康麦芽飲料も作っています。大学での講義とその準備、論文、会議、講演、県の環境関連の委員の仕事などを夫婦ともに、それなりにこなしつつあります。市民団体の集まりやボランティア活動もいろいろとありますが、あれもこれもと頑張り過ぎてパニックにならないように、優先順位に気をつけています。

(編)ところで、新築にしては、土間があったりしてずいぶん昔風のところが多い家ですね。

(遊)はあ、県内産の材を産直してもらい、近くに住んでおられる宮大工さんとともに、地域の多彩な人脈に助けられて1年以上をかけて建てた家ですが(写真1)、その話をしだすと止まらなくなりますので〔安溪遊地・安溪貴子、1996〕、またの機会にじっくりお話ししましょう。

2、I村の (編)1割以上も新規就農の家があるということは、かなり特別な集落のよう
こと



写真1 かやぶきの形をしたわが家
(古民家再生工房 萩原義郎氏撮影)

すが、どこが魅力なんでしょうか。

(遊)受け入れ側でも、新規就農者が夫婦で定着して、生活環境を整備しつつほかの家と協調して暮らせるための最低限度の現金収入が確保できるように、始めの2年間の給与や、生産から販売までのていねいな指導をしています。しかし、すべての機具や設備を先行投資で一度に揃えることになる新規就農者にとって現実には厳しいようです。そもそも仁保という所は、「近代的田舎社会」をめざすという目標をかかげて、過疎になりやすい山奥の不便な地区から優先的に道路や水田を良くしていく、という計画を実行してきたところです。

(貴)無計画な開発が進んだ平場にはない、自然の魅力は大きいですね。それと、若い人たちがけっこういるところと。

(遊)2世代同居の専業農家もあるけれど、だいたいは兼業農家で、山仕事の人もいます。約30年前からキクづくりを基幹産業に育ててきて、その後継者不足への切り札として、新規就農者の受け入れをすることにしたという所でしょう。うちの世話をしてくださった末永昌巳農協長としては、私たちが住むことで仁保からの情報発信の手助けになれば、というもくろみもあったようです。

(貴)村入りの話を進める段階で、「I村を良くする会」のみなさんから口頭試問を受けたわね。

(遊)そうそう。問いはひとつで「村には共同作業があるが、参加してもらえるか」というものでした。別荘気分なら許さないということでしょう。これは、仁保地区全体の方針でもあって、100戸の団地をという話を断ったということがありました。町からの植民地のようなものを認めて、先住者の論理がないがしろにされることがあってはならない、というのが、「近代的田舎社会」づくりの基本方針のひとつです。

(編)「I村を良くする会」というのは、どういう活動をしているんですか。

(遊)I村の将来計画をたてて、その一環として土地の取り引きをコントロールしています。不在地主の土地も不動産屋の介入を許さずに、乱開発を防ぐというわけです。村を通る県道がrippana 2車線になっているのも、「良くする会」が土地買収の下準備を整えておいたおかげで、他の集落に先駆けて実現したものです。

(貴)「春山開き」という新しい祭を作って7年目ぐらいですけど、村の外からも人が集まって、山に登ったあと交流会をするという大きな祭になってきています。私はこのお祭りの裏方で、集落中のいろんな世代の女の人たちと400人前の蕎麦汁、おにぎり、こんにゃくのあえ物なんかを準備するんですが、こ

れがとっても楽しいんです。みなさんの会話が明るくてユーモアたっぷりです。(遊)共同作業の道草刈りに参加して驚いたことは、村の中の農道だけでなく、隣の防府市に属する道も延々6キロにわたって草刈りをするんです。もう70年も続けてきたから今さら止められないという説明でした。実は、この曲がりくねった細い道を拡幅してほしいという陳情を以前からしていて、草刈りを通して、これが自分たちの生活道路なんだということを示し続けているというわけなんでしょうね。

(貴)このあいだ、山火事があった時は村にいた全員が出動して、近隣の地区からも駆けつけた100人近い消防団員のために私たちも炊き出しをしました。いざというときの団結がとてもよく見える機会でした。

(遊)それと、新入りでも元からある家と権利・義務において区別をしない、ということが村の原則として確立しているんです。昭和30年代までは、I村にも新戸と旧戸という区別があって、共有林の権利なんかにも差があったらしいんです。それをすべての家の株数を共通にする英断がなされました。そして、村を離れるものからは、共有林の権利を没収するということのようなのです。松茸がたくさん出たころは、共有林は大きな収入源をもっていたわけですから。

(編)村に入って何か摩擦はありませんか。

(遊)松枯れの空中散布がされていて、その効果についての意見の相違とかはありますが、逃げも隠れもできない隣人同士ですし、そういうことは村の外で言うことではないと思っています。

(貴)新規就農のおひとりが、「20年後を考えて生きようと思っている」とおっしゃったので、感心してうちも見習わなくっちゃと思っています。

(遊)うちが田畑に化学合成のものを使わないことについては、村のみなさんもよくご存知で、新しく借りる田は、山の中に孤立したすてきな場所を考えてくださったんです。

(貴)「無農薬でも、どんな実験的な農業でも心おきなくやってください」とおっしゃってね。事前にトラブルを避けるその心遣いに本当に感謝しています。

- 3、始まり (編) こういう暮らしをするようになられたきっかけに興味があるんですが。
 はささ (遊) 昔は、フツの研究者をめざしてたよねえ、僕ら。どうしてこうなっちゃっ
 やかな た？
 畑だっ (貴) 今にして思えば大切な挫折もいろいろあったし。ようやく、ひとつの大き
 た な曲がり角をまがって、私たちがこういう暮らしをするようになったきっかけ

は何だったのかしら。

(遊) 1畝 (30坪) ほどの畑を初めて借りたのが、1年半のフランス滞在を終えて帰ってきた翌年の1989年。

(貴) フランスでお客を招いてパーティをする楽しみを覚えたので、狭い官舎を出て、田んぼの中の一戸建ちの借家に引っ越したら、隣の人が小さな畑をしていたわね。グリーンピースをもらったら、とれたては、こんなに美味しいのかってびっくりしたの。それで、畑があるなんてうらやましい! と思ったわけ。

(遊) それで、家の前の田んぼを借りることができるようになって、近所の女性が畑の荒おこしを手伝って指導してくださったなあ。朝、畑仕事をしていると、横を学生が自転車通って、「先生、そろそろ授業ですよ」なんて挨拶して通ったりもしたなあ。ちょうどそのころ、大学の授業で使おうと思って、日本子孫基金のビデオ『ポストハーベスト農薬汚染』(学陽書房)を買った[安溪遊地、1993a]。

(貴) あのビデオを見た時は、主婦として、頭の中が真っ白になりました。レモンなんか食べなくても困らないけれど、国産の大豆も小麦も手に入らないし、お豆腐は? パンは? と思った。家族にいったい何を食べさせたらいいの? スーパーに行っても、手ぶらで帰ってくるということが多かった。だから、子どもと畑に植えたじゃがいもがとれたしたのありがたいと、それを朝食に食べ、それからサツマイモを小さな畑一面に植えた。西表島に行ってひと夏留守をしたのに、帰ってみると雑草の中にすばらしいサツマイモができていたの! 私は何の世話もしていないのに、ちゃんとイモを育ててくれたお天道さまへの感謝の気持ちが湧き上がってきましたね。

(遊) 干し芋を作って、春まで大事に食べたね。

(貴) それから、落ち着いてよく探せば、国産小麦粉のパンも、国産大豆の豆腐もそれほど高くない値段で入手できたのよ。北九州に中心があるグリーンコープ生協に入ったおかげが大きいけれど。そして産直の関連で、卵と野菜の生産者の1人の鈴尾さんの所へもたずねて行くようになったし。

(遊) 彼は、農学部を出て新規就農した人だけど、家族ともども村の中心のひとつとしてしっかり根をはって頼もしいね。ここに彼が書いた文章があるから、読んでみよう。

「集落での水田受託組織作り、都市部での直売所作り、鶏糞の堆肥利用組織、趣味のほうでも、私たちの主権による和太鼓まつりの開催など、これらが一気に集中してきた」

彼の、新規就農者の役割についての意見も傾聴に値するよ。自分の家族だけ安全な食べ物が手に入ればそれでいい、という消費者の身勝手な立場も農村が崩壊したらありえないのだということがよくわかる。

「私のライフワーク『百姓を増やす』という考えは全く揺るぎない。しかし考えてみれば、新規の就農者の支援もいいが、今のところ村に在るが、元気を失いかけている後継者をもり立てて、一緒に頑張っている方法を探すのも、重要でかつ成功率も高いような気もするのである。……つまり、周囲の農業者との連帯によって、農業、農村そのものを起こすことが、時代の要請ではないだろうか」〔鈴尾一夫、1997〕。

- 4、わが家 (編)最近は、お米を買わないでよくなったそうですが。
- の稲作 (遊)僕は、西表島の昔の稲作の研究〔安溪遊地、1992a〕から、合鴨を使って一切の化学物質を使わない西表島の産直米の宣伝係までやってきているわけだ
- のはじ けど〔安溪遊地、1992b、ヤマネコ印西表安心米生産組合、1997〕、自分で作
- まり りはじめたのは……
- (貴)1993年だから。今年は5回目になるわけね。
- (遊)津野さんの研究室へ内地留学するという名目で大山の麓の海辺の村に紹介していただいたのがきっかけになったけれども、あの時にはもう今のような暮らしをしようと山口で土地を求めはじめていたっけ。
- (貴)だから、そのための実地練習のような意味もあったわけ。あれからずっと再生紙マルチの手植えの稲作ね、うちは(写真2)。
- (遊)雨ばかりの寒い夏だったけれど、あの米騒動の中で、自分の田でとれた家族1年分の粃を枕もとに積み上げて寝るといのは、なんとも言えない豊かな気分だったね。
- (貴)村の人たちは本当に親身になって世話をやいてくださって、大事に思ってくださったわ。あんなに毎日のように差し入れをいただいたことは、後にも後にも初めての経験。そんな中で私が激しいショックを受けたのは、子ども会の親の集まりで、雨のたびに水につかる通学路の改修をどうするかという話題の時に、1年生の子どもをもつお母さんが「陳情して議員さんを動かそうよ。私らの孫の時代までも使う道でしょう」とおっしゃったこと。私なんかずっと借家住まいで、孫がここに生きていくって考えたことなかったもの。
- (遊)それと、なし畑が工務店のゴミ捨て場にされて、まだ使えそうなりっぱな輸入材木が捨ててあるのを見た村人たちの言葉が印象に残ったね。「人間は、



写真2 再生紙マルチ田植え

ものの心がわからんとなあ。あとは野となれ山となれでは、畑を開かれた祖先に対して申し訳がないですけえなあ。」と口々におっしゃっていた。あの村では、祖先と子孫の両方に恥ずかしくないように今を生きるということを教えられた気がしたし、日本の田舎のもっている底力、やさしさ、すごさをひしひしと感じることができた鳥取での1年でした〔安溪遊地、1994a〕。

(貴)鳥取のこの村だけが例外的にすごいのではなくて、この力を失っていない地域もまだまだ多いだろうと思うわ。

(編)あのお、それでは私はこのへんで失礼します。

(遊・貴)あ、まだいらっしゃったんですね。どうもお疲れさまでした。

- 5、フィールド (遊)先日、山口の環境教育学会の例会で、環境保全型農業を熱心にやってきた人からこんなことを聞かれたねえ。「うちでは、無農薬とか、合鴨とかやっていても、亭主の道楽みたいに見られて、まったく女房の理解がないんだけど、の経験 いったいどうやって奥さんをそううまく説得されましたか。」それで「もう20年以上、アフリカやら沖縄やらフランスやらをいっしょに回って、しっかりマな暮ら インドコントロール (笑い) してありますから」って答えただけけれど。
- し (貴)アフリカの森の中の小さな村で1年ほど過ごした経験は大きかったわね。

電気もガスも水道も新聞もなくても、皆がにこにこ元気に生きているし、大丈夫だという自信みたいなものね。近代文明の道具や機械がなくても、自然が豊かなら人間はその土地の智恵で十分に生きていけるということが実感できたもの。

(遊)そして、一見古くさいものが案外最先端だったりするということも学んだね。例えば、漁民と農耕民の間の物々交換の市場がどんどん復興していたけれど、20歳ぐらいの市の監督が、国の経済が悪化する中では、このシステムでなければ、ひとり暮らしのおばあさんが一切れの魚を手に入れることは難しい、だから社会福祉としてやっていると言っていたんだから〔安溪遊地、1991b〕。(貴)西表島の人たちとおつきあいにも大きな影響を受けてるわ。食べものは、すべて自分たちで作ったり採ったりして、その恵みに感謝しながら生きてきた人たちとの対話。西表島の、今はなくなってしまった村での「自然生活」ともいべき暮らしはぐくんできた智恵を、失われてしまったものとして嘆くのではなく、自分の生きる場でもう一度生かしていく道を歩みたいと思うようになった〔安溪貴子・安溪遊地、1992〕。

(遊)フランスでたくさんの友達ができたけれど、その中でも大きな影響を受けたのは、アフリカ研究の修士号をめざしていたジャン・フランソワと巡回看護婦のブリジットのカップル。田舎が好きでノルマンジーの親戚の農家に住んで、彼は、週に何回か片道3時間ほどかけてパリの研究所に通うという生活をしてたね。

(貴)5ヘクタールほどの広さの庭(!)がある古い農家で、ほんとうに素朴で豊かな自然の中の生活だった。そして、「招待はしないから、気がむいたらいつでもおいで。扉はあけてあるから」と言ってくれたわ。

(遊)ジャン・フランソワが修士論文を仕上げる忙しい合間に、生まれてくる初めての子どものために、特製のベッドを作っていたので、僕は自分が目を血走らせて修士論文を書いていた時のことを思い出してその違いの大きさにショックを受けた。僕も手伝わせてもらったけれど、藁葺き屋根がならぶ村の水車小屋で、粉挽き人形がオルゴールを回す、というこった飾りを手作りで作るんだ。

(貴)ブリジットの出産の時に私たち家族とアフリカの友人が招かれていて、「こんな時に本当にいいの?」って聞いたもの。そうしたら、「大切な時とともに過ごす仲間がいることはすばらしいわ」っていう返事でした。

(遊)なんという豊かさだろう、と本当に印象深かった。金もちではないけれど、「自然もち」、「友達もち」、「時間もち」、そして、それは彼らの voluntary

simplicity（自分で選び取った簡素生活）の豊かさだった。僕は、あの豊かさは二人がアフリカで研究とボランティアの経験をしたことからくる贈り物だろうなとらんでいるんだ。

(貴)私は、あの家で「心の扉を開けて友達づきあいをする」ということを学んだような気がするわ。

- 6、虫が怖くなく
なってきた
- (貴)畑を始めたとき、子どもが小学校の1年生で、男の子だからと思って、私はそれまで虫やミズが怖かったんだけど、がまんして付き合い始めた。そうしたら最近、ちっとも怖くないし、話しかけられるようになってきた。
- (遊)話かけるっていうと？

(貴)玄関の灯りに集まる虫を食べているカエルに、朝出かける時に「おはよう、元気？」と挨拶しながら暮らしているうちに、親近感が湧くようになったのよ。理屈っぽく言えば「ともに同じ時代を生きているいのち同士」という感じというか。

(遊)でも、ヨトウムシが野菜の根っこを切って倒しているのを見ると「この根っこ切り虫！ちゃんと残さず食べなさいよ」って腹たたない？

(貴)ところが、最近あまり腹がたたないの。

(遊)このあいだは、たぬきたちにまだ小指ほどの人参や未熟なピーナツを全滅させられたっけねえ。雪のあとにひとつねの大根の地上部分が完全に消滅していたこともあった。

(貴)食べられたのにしばらく気がつかないほど、大根が葉っぱ一枚残さずに食べてあったの。それで、この雪でたぬきさんたちもお腹がすいたんだろうなと思えたのよ。

(遊)津野さんにならってカラスとの会話も練習中だけど、なかなか上達しないねえ。それでも、朝起きたらうちの山に向かって「みんな元気カア！」って呼んでみるようにしています。僕たちの知り合いの屋久島の老百姓さんのように、死にかけたコイに13時間も人工呼吸して生き返らせてしまうようなことまではできなくても、しだいに自然の声が聞こえるようになってきている気がする。

(貴)大山に登った時、ぶなの実を拾って食べたから、私は一部分では大山のぶなの木でもあるというのが、今の私の素直な感じ。生物学を学んだ立場で蛇足を付け加えるなら、大腸菌も人間も同じ遺伝子をもっているということは、菌も虫も鳥も木も花もそして人間もみんなが同じ時を生きてきたのだし、今生きている仲間だということを証明してる。そして、この地球は、いのちが生まれ

て以来それらをずっとはぐくんできたし、環境と生命の微妙なバランスの上に、私の今もあるんだということが頭でわかるだけでなく、心でも感じるようになってきたと思う。

(遊) そういう意味では、自然にあこがれて農的な暮らしを志すうちに、いつの間にか自然からのメッセージが感じられるようになってきたということかな。現金収入と無関係なまねごとの農業をしながら、勝手なことをいうなという批判も耳に届くけれど、かなりの経営規模の専業農家でも、自然との深いきずなを楽しみながら暮らしている人を何人も知っているからなあ。

(貴) 農的な暮らしの中でこそいえる、私が歩みたい道のイメージ。それは、あえて言葉にすれば、自然の中からいのちをいただいて食べて、毎日の暮らしの中から出たものがまた自然に帰っていく、そんな暮らしになれたらなあ。町に住んでいたころは、自分の出したゴミや汚れた水がどこへ行くのかということをも自分の問題として考える必要がなかった。

(遊) ここに生き続けるんだということから、今日何を最優先すべきかが決まってくるし、まだ生まれていない世代のことにも自然に考えがおよぶようになってくるよね。そして、自然が神だと信じて暮らしてきた南の島々の人たちや〔例えば、安溪遊地、1993b〕、人間の役割は大自然の神々を喜ばせてその恵みをますます豊かにしていくことだ、というアイヌ民族をはじめとする先住民族の人々の世界観も〔安溪遊地、1994b〕、ここに暮らしてしだいに近いものに感じられるようになってきた感じがするね。

7、自然の (遊) この家は、若い人たちにはかなりインパクトがある家らしいね。こんな家中で育つ感性

(貴) そうね。農的生活に惹かれている町の人がうちにくると、なんか励ましを受けたいね。

(遊) このあいだ、大学生と、僕が講義に行っているご縁で農業大学の学生がうちの田植えに来てくれて、昼前から雨になったから、ごはんを作って食べたあとは、一日中おしゃべりだったね。僕が長い昼寝をしている間にずいぶん話が盛り上がっていたみたいだけど。

(貴) 6、7人で輪になって座って思いのたけを語りあったの。農業に心がむいた人たちの集まりだったから、私には心が共振しやすかったのかもしれないけれど、ひとりひとりの話を皆が共感しながら聞いて、いっしょに悩んだりお互いに感動したり……。

(遊)寝てて損したかな。どんな話が出たの。

(貴)大学を卒業してから、悩みながらもやってみたかった農業の道を選んで、農業大学校に行き始めた人。彼女は、今楽しくて仕方ない、やりたかったことだから辛い、楽しいんだって。そのうえ、大学の文科系の学部で過ごした4年間はちっとも無駄じゃなかった、大切な4年間だったと今思うという話だったの。

(遊)彼女は、亡くなったお父さんの志をうけつぎ、ふるさとの島の農業再興の夢を花開かせたいんだよね。

(貴)私は、息子の不登校をめぐって、これは実は子どもだけの問題というよりも、親である私の、今の世の中での生き方の再発見の機会だと思うようになったという話をしたの。ある農業大学校の学生さんはこんな話だった。最近、精神的に落ち込んでしまってつらくてつらくて仕方がなかった時に、それでも牛の世話があるから牛舎に通っていた。そうしたら彼女にまかされている10頭の牛のうち5、6頭が身体を寄せてきて「どうしたん？何があったん？元氣出し！」と言ってきているようだったんだって。それで彼女、牛舎で泣いてしまった……。

(遊)きっと考えごとをしていて彼女の辛さに気づかなかった牛もいたんだ。

(貴)違う生き方、違う悩み、違う夢をもっている人たちがここで出会える。私の経験では、大学時代のクラブ合宿で仲間の中のひとりか二人に共感して夜遅くまで話しこむ、そんな程度だったのに。いろいろな人たちが、平常心を失わず、穏やかに本音を語りあい、そして共感しあえる時がもてたことはほんとうにうれしいことだと思うの。そういう出会いの場にこの家がなれたということかな。

(遊)たしかに、うちに来た学生たちが農作業や山仕事をして、それからいっしょに食べておもむろに話すと大学ではなかなかできないような気づきがいりあるよね、前に話した七夕のたき火と星と蛍の時もそうだったけれど。

(貴)若い人たちが自然の中に入っていくことで、感性が育っていくと思う。それもハイキングや遊びではなく、物を作るという経験は、深いものにつながっているのよ。例えば、自分で田植えをしてみると、気をつけていてもぐにゃぐにゃ曲がってしまう。それだけで「お百姓さんはえらい！」と気づいたり、「農業は奥深いものだなあ、とちょっとやっただけの初心者の私は感心しました」と感想を書いたりするの。忘れていた夢に気づく人もある。7年ぶりぐらいに会った大学院生は、農学部の博士課程でバイオのことをやっているんだけど、畑のうね立てをしたりしたあとで、「私、学校の研究以外にもやりたい

ことがいっぱいあるのだと気づいた」と話していたわよ。

(遊) さらに言うなら、農業経験の豊富な人が来ていっしょにやってくると、土着の智慧のすばらしさがわかるし、その人を先生として本当に多くを学べる気がする。今はやりの環境教育のカリキュラムの中心には「農林業経験と土着の智慧」といったものをおくといいね。

- 8、雨の日 (遊) 若者たちとともに農的な暮らしへの道をたどりながら、こんな本に出会うにはたということを少し紹介しておこうか。まず、渡部忠世さんの最新作の『農は——農的暮らしへむける』(小学館)。農という人類の営みの歴史を踏まえ、同時代の発言も集めて未来を照らす智慧の集積。畑に出たあとで読むと、さらに味わいしへむけるのが深まると思う。

(貴) 私たちの経験では、農的な暮らしへの第一歩を踏み出すと、「便利さになれちゃって、科学技術の恩恵や貿易のもたらす利益なしには日本人は絶対に暮らせない」という考えのおかしさにだんだん気づくようになる。

(遊) タイやナイジェリアでフィールドワークをしている渡部重行さんの『共生の文化人類学』(学陽書房)は、私たちの「豊かさ」の裏側について、700近い文献を駆使して説得力のある説明を展開してくれているね。実地のフィールド経験の中でしなやかに思索しながら、世の中にあふれているまゆつばものの情報を見抜く力が備わるんだろうな。

(貴) 津野幸人さんの『小農本論——誰が地球を守ったか』(農文協)の冒頭に、とっても印象的な話が載っているわね。昭和19年の冬、中学2年生の愛国少年だった津野さんは特攻隊を志望して予科練に合格した。その時、〈片田舎の一介の老農夫〉であったおじいちゃんがこういったというの。「日本は負ける。お前らみたいな子供までが死ぬことはない。明日これで小指を切れ。小指がのうても百姓はできる」と牛の飼い葉を切る押し切りを指さしたんだって。当時、国際的な情報を一切もたないおじいちゃんが、大本営発表などの圧倒的な世論工作とマインドコントロールに抗して、日本は負けるということが的確に判断できた根拠というのが、古いアメリカ製の剪定鋏だったの。もらって20年にもなるのに、バネはびくともしないし、切れ味も新品同様。「百姓道具にこれだけのええ鋼鉄を使う国なら、兵器も日本のものとは較べもんならぞな」とおっしゃったんだって。

(遊) あの本の最後には、「今こそ農業が面白い」というタイトルで第3種兼業にめざめていく喜びがその人類史的な意味とともに生き生きと描かれている

ね。

(貴)最近読んだ本ですばらしかったのが、宇根豊さんの『田んぼの忘れもの』（葦書房）。私たちが見つけた宝物がみんなのタカラモノになるしくみを考える勇気が湧いてくる。

(遊)同じく葦書房で、うちの仁保農協の末永昌巳組合長の『むらからの便り——ある農協の試み』は、仁保の夢が伝わる読みやすい本。

(貴)科学はほんの少しのものだけを選び出してきた。軍事や経済の論理が見捨てたものの中に大切な忘れ物があるのよね。その結果、私たちが直面することになったおそろべき環境問題については、市川定夫さんの『環境学』、『環境学のすすめ（上）（下）』（どちらも藤原書店）が包括的に示している。そして、地球環境の現状と未来について絶望にみだされそうになったら、産業文明崩壊のあとのたそがれの時代を描く宮崎駿さんの『風の谷のナウシカ』（徳間書店）とジョアンナ・メイシーさんの『絶望こそが希望である』（カタツムリ社、地方小出版扱い）を勧めたいな。

(遊)特に生命を自由にあやつようになった人類が陥った深淵とその中での希望をナウシカが語る第7巻ね。ゴミの捨てどころを考えただけでも避けられない工業社会の崩壊の中でのパニックを避ける智慧については、『未来へつなぐ農的暮らし』ほかの樋田劭（たかし）さんの本（樹心社から5冊、発売は星雲社）がいいと思う。

(貴)私ね、昔からの伝統の智慧が失われることをなんとかいとめたいと願ってきたけれど、それももう仕方がないかな、と思うようになったの。いったん失ったように見えても、真剣に求めればまたそれを再発見できるし、今に生かすこともできる。西岡常一棟梁が飛鳥時代からの宮大工の技を、口伝もあつたけれど法隆寺の解体修理を通して研究して身につけて、それがこんどは民家にも通用するとして『西岡常一と語る木の家は三百年』（農文協）という本が出たことがその一例。

(貴)環境問題の話の聞いたりすると、うちの14歳の息子は「大人はばかじゃ」というのね。子どもたちは、大人が作った今の世界の歪みを全身で感じていると思うの。そして、必死で叫んでいる。この地球を受け継がなくてはいけない子どもたちだからこそこの歪んだ世界が痛いほどわかる。それを生み出してしまった私たちは、ものごとを根本から見つめ直し、気づいた人からひとつひとつ歯車はずしていく。それしかないと思う。そのために、学校離れの経験を通して自分を見つめなおし、軽やかになっていく子どもたちに学ぶ点は多いわ。

東京シュレーの子どもたち編『僕らしく君らしく自分色——登校拒否・私たちの選択』（教育資料出版会）を読むだけでもそれがわかる。

(遊)歪んだ世界の例だけれど、チェルノブイリの原発事故で汚染されてしまった広大な大地に住む人たちにとっての暮らしや農業を考えると、明日がないどころか、明後日も明々後日もないわけだ。チェルノブイリ支援運動・九州がまとめた『わたしたちの涙で雪だるまが溶けた——子どもたちのチェルノブイリ』（梓書院）を読むと、子どもたちの悲しみと祈りが激しく心をゆさぶる。ところが日本では、農業と農村の未来を大人たちが集まって考えていても、原発事故のことまで考えての発言はめったに聞かれない。

(貴)ひとたび大事故が起これば、日本中が環境難民になってしまう可能性もあるのに、それをないことにしているいろいろ議論していることに、子どもなら大きな疑問を感じるでしょうね。

(遊)スウェーデンの北の大地に住むサーミ人は、トナカイを飼うことが民族の誇りをこめた伝統的な仕事だったのに、チェルノブイリから飛んできた放射性のセシウムでトナカイの餌の地衣類が汚染されて、あと30年はトナカイの肉が食べられない。それで、よそから地衣類を輸入してトナカイを飼っているんだって。日本人が稲作を30年やめなさい、といわれたようなものだよ。そして、サーミの土地は、チェルノブイリから1900キロ離れている……。

(貴)1900キロというと、東京と西表島の距離ね。ということは、日本を含めて東アジアのどの原発もアジアの人々の生活に深刻な影響をおよぼす可能性が否定できないということになるわね。

(遊)原発については、みんなが地元だということだ。工業社会の発展のために若干の犠牲はしかたがないなどと叫ぶ人々に対して、例えば屋久島のお百姓さんの「食べものは、いのちを支えるものでしょう。もともとお金では買えないはずの物なんですよ。日本のようにいつまでも外国から物が来ることを期待してはいけません」というような気づきの言葉がきっと力をもつようになると思うな。町に住んでいる人で、とてもいろいろなことを感じたりする暇もなければ畑に立つ気力もないよ、という人のためには、『タイム・シフティング』（NHK出版）がお勧め。ミヒヤエル・エンデさんの『モモ』（岩波書店）のように「時間もち」になれる智慧が書いてあります。

[チェルノブイリ紀元12年7月29日稿]

引用文献

第8節で取り上げた19冊の本については本文を参照してください。

安溪 貴子・安溪 遊地編、山田 雪子述

1992 『西表島に生きる——おばあちゃんの自然生活誌』（おきなわ文庫）第63冊
ひるぎ社、1-230.

安溪 遊地

1991a 「される側の声——聞き書き・調査地被害」『民族学研究』56(3)：320-326.

1991b 「再訪・ソングーラの物々交換市——『伝統』の今日的な意味について」
『ヒトの自然誌』平凡社、377-396.

1992a 「西表島の稲作と畑作——南島農耕文化の源流を求めて」『琉球弧の世界』
小学館、575-601.

1992b 「無農薬米の産直が始った——島を出た若者への手紙」『エコノミスト』
7月21日号：76-79.

1993a 「あなた何を食べていますか——ポストハーベスト農薬汚染とわたし」
『自然生活』第5集：45-51.

1993b 「橋をかける⑧ 野も山も海も川も神々の住い——上屋久町宮之浦・中島
キヨさん本溜ヶサさん聞き書き」『生命の島』屋久島産業文化研究所、29号
：25-34.

1994a 「大山のふもとで屋久島を想う」『生命の島』31号：35-39.

安溪 遊地編

1994b 「はじめて習ったアイヌ民族の歴史——大学生の反応から」『自然生活』
野草社、第7集：71-79.

安溪 遊地・安溪 貴子

1996 「百三十年もつ住まいを わが家づくり奮戦記①」『生命の島』37号：35-38.

鈴木 一夫

1997 「『運動』の発展方向（私見）」『ゆうき』第1号、山口県有機農業研究会.

山下 惣一

1993 『脱サラ農民はなぜ元気』家の光協会.

ヤマネコ印西表安心米生産組合

1997 「安心はおいしい!!」『日本 -早い新米ができるまで』『ヤマネコ NEWS』.